

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、現在約1,200ヶ所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため、埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究、展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。

この度発掘調査を実施しました勝原区丁は、瓢塚古墳をはじめとする古墳が数多く存在し、「播磨国風土記」には大田の里として登場するなど、播磨の歴史を語る上で欠かすことのできない重要な地域です。

なかでも、丁・柳ヶ瀬遺跡は、市内を代表する集落跡として注目を集める遺跡です。その歴史は長く、古くは縄文時代から現在に至るまで連綿と人々の営みが続いてきました。この度の調査成果は、地域の歴史に新たな発展をもたらすことと存じます。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社フィットライフ近畿、その他関係各位のご尽力に心より感謝を申し上げます。

平成26年（2014年）3月

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

目 次

序

目次・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地の位置と周辺の遺跡	1
第2章 調査の成果	2
1. 調査の概要	2
2. 弥生時代から古墳時代の遺構	4
3. 古代の遺構	10
4. 中世の遺構	12
第3章 総括	12

例 言

1. 本書は、兵庫県姫路市勝原区丁字堂垣内451番1他に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡（遺跡番号：020327）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、株式会社フィットライフ近畿からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。

3. 本発掘調査（調査番号：20130282）は、姫路市埋蔵文化財センター小柴治子、関桝、玉越綾子が担当した。また、確認調査は、小柴治子が担当した。（調査番号：20130191）
調査の体制は以下の通りである。

教育委員会事務局 教育長	中杉隆夫	埋蔵文化財センター 館長	秋枝 芳
教育次長	林 尚秀	係長	森 恒裕
生涯学習部長	小林直樹	主事	嶋田 祐
文化課課長	福永明彦	技術主任	小柴治子
文化財課係長	大谷輝彦	技師補	関 桢
文化財調査技術主任	福井 優	嘱託職員	玉越綾子

4. 整理作業及び報告書の作成には、以下の職員の協力を得た。

黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代

5. 本書の執筆・編集は、小柴、関がおこなった。

凡 例

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
2. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
3. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP、井戸→SE、溝→SD、竪穴建物跡→SI、掘立柱建物跡→SB 自然流路→NR
4. 本書で使用した土器器の器種名及び年代観については、長友朋子編 2007「弥生土器集成と編年一播磨編」に準拠した。ただし、不確定な個体については、器種の細分を行わなかった。
5. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯

姫路市勝原区丁において、株式会社フィットライフ近畿による宅地造成工事が計画された。当該地は、丁・柳ヶ瀬遺跡（遺跡番号：020327）の範囲に所在している。このため、平成25年（2013年）8月3日、工事予定地内に2×1.5mの試掘坪を5箇所設定し、確認調査（調査番号：20130191）を実施した。

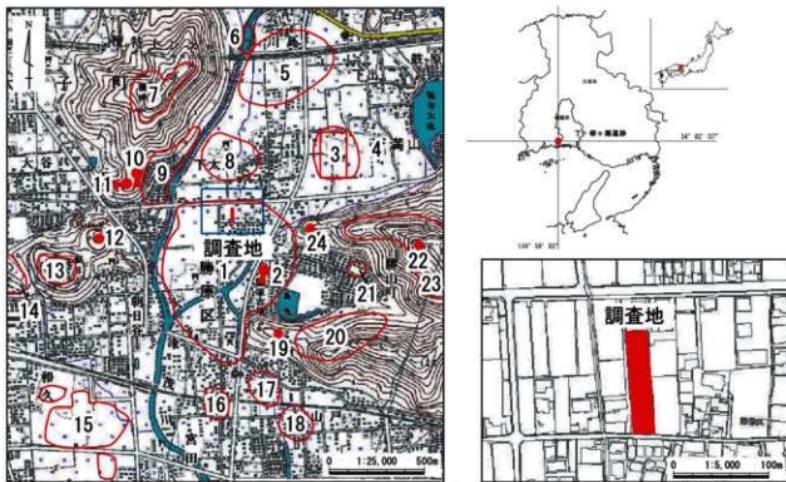
その結果、弥生時代から古墳時代の遺物を多く含む堆積層、古代及び中世の構造を検出し、遺跡が良好な状態で残されていることが判明したため、本発掘調査を実施することになった。

調査期間は、平成25年（2013年）9月30日～10月19日である。

調査は株式会社フィットライフ近畿の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。

2. 調査地の位置と周辺の遺跡

調査地は、縄文時代から中世の集落遺跡である、丁・柳ヶ瀬遺跡の北端に該当する。市内の遺跡の中でも、存続時期の長い複合遺跡として知られ、大津茂川下流域の拠点的な集落の一つと位置づけられている。遺跡の範囲内に、古墳時代前期の前方後円墳である瓢塚古墳が所在し、周辺の山上にも前期古墳が集中している。また、8世紀に編纂された「播磨國風土記」大田里の項には渡来人の記述がみられ、それを証明するかのように、埋葬施設が窓式の横穴式石室である丁山頂古墳や、7世紀半ばが創建時期とされる下太田廃寺など、渡来人と関わりがうかがえる遺跡も数多く所在している。このほか、丁・柳ヶ瀬遺跡では、昭和55年度に兵庫県教育委員会が実施した西汐入川の発掘調査において、「大伴」と書かれた墨書き土器が出土しており、聖徳太子によって掛布郡内の水田司に任じられた大伴連との関連が指摘されている。



1 丁・柳ヶ瀬遺跡 2 瓢塚古墳 3 下太田廃寺 4 ツクワ遺跡 5 川島遺跡 6 大津茂川床遺跡
7 樅特山山頂遺跡 8 下太田遺跡 9 樅特山遺跡 10 樅特山3号墳 11 樅特山1号墳 12 朝日山1号墳～3号墳
13 朝日山城跡 14 朝日山遺跡 15 和久遺跡 16 茶屋遺跡 17 山戸遺跡 18 南山戸遺跡 19 山戸4号墳
20 山戸1号墳～18号墳 21 勝山町古墳群1号墳～5号墳 22 丁山頂古墳 23 丁古墳群1号墳～5号墳 24 薬師古墳

図1 調査地の位置と周辺の遺跡

第2章 調査の成果

1. 調査の概要

本発掘調査は、開発区域の北側、東側及び西側の一部の擁壁(総延長114.7m)に加え、下水道敷設工事の範囲(延長67.5m)を対象とした。調査面積は、268.84m²である。調査箇所が大きく2ヶ所に分かれため、北西側を1区、南東側を2区とした。

調査地の基本層序は、北端が微高地の縁辺部にあたり、耕作土、床土を経て現況から約30cmで遺構検出面に達する。しかし、南に向かって地形が低くなり、北端で遺構検出面であった基盤層は、南へ約8m付近から急激に検出レベルが下がっていく(図3)。2区南端のほうでは、弥生時代から古墳時代の遺構と中世の遺構の検出面に20cmの高低差があり、北端に比べて不安定な土地環境であったことが推測される。しかしながら、遺構は調査区のほぼ全域に分布し、堅穴建物跡2基、ピット99基(この中から掘立柱建物跡3棟分が抽出できた)、井戸1基、溝5条を検出した(図2)。



写真1 調査対象範囲 南西から

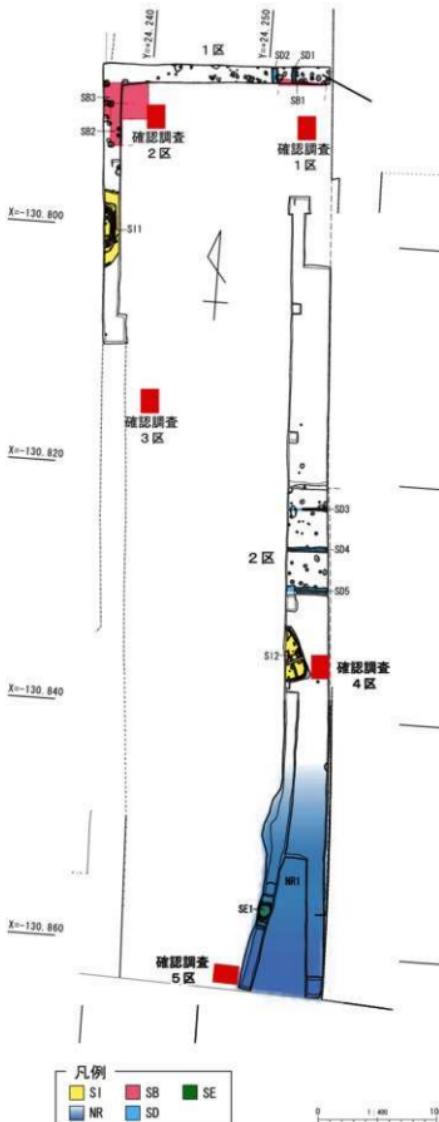
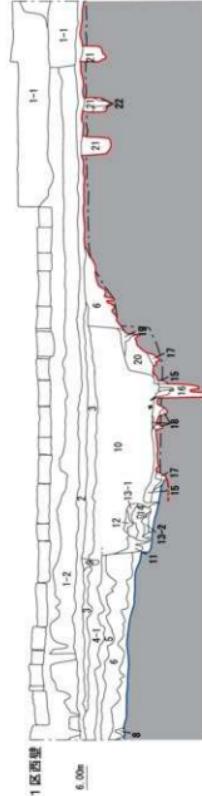
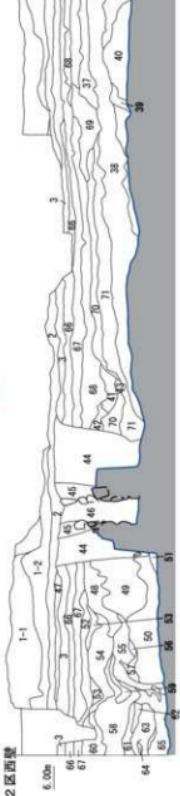


図2 調査区全体図 S=1:400



卷之三



2区

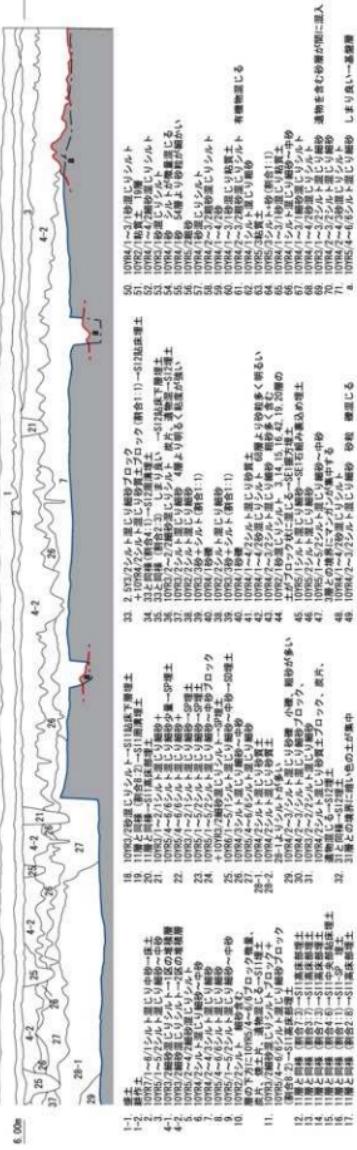


图3-1 区西壁、2区西壁

2. 弥生時代から古墳時代の遺構

(1) 穴室建物跡 SI1

I区南西で検出した。検出面のレベルは標高約6.0mである。

調査範囲が狭小であるため、全体のプランは不明であるが、調査範囲内からは隅円方形ないし五角形の平面プランが想定される。検出した範囲内での規模は、幅1.2m、長さ6.6mを測る。周壁に沿って幅0.2mの周壁溝及び、幅1m、高さ0.2m前後の高床部がめぐる。高床部は盛土で構築されていた。また中央の床面には全面に厚さ5cm程の貼付が施されていた(図4)。

貼床及び、高床部盛土の下層からは、高床部のプランに並行して2条の溝を検出した。これらの溝は切り合いがあることから、高床部の補修をおこなっていた可能性も考えられる。

SI1の時期は、出土遺物から弥生時代末～庄内式期に比定される(図5)。

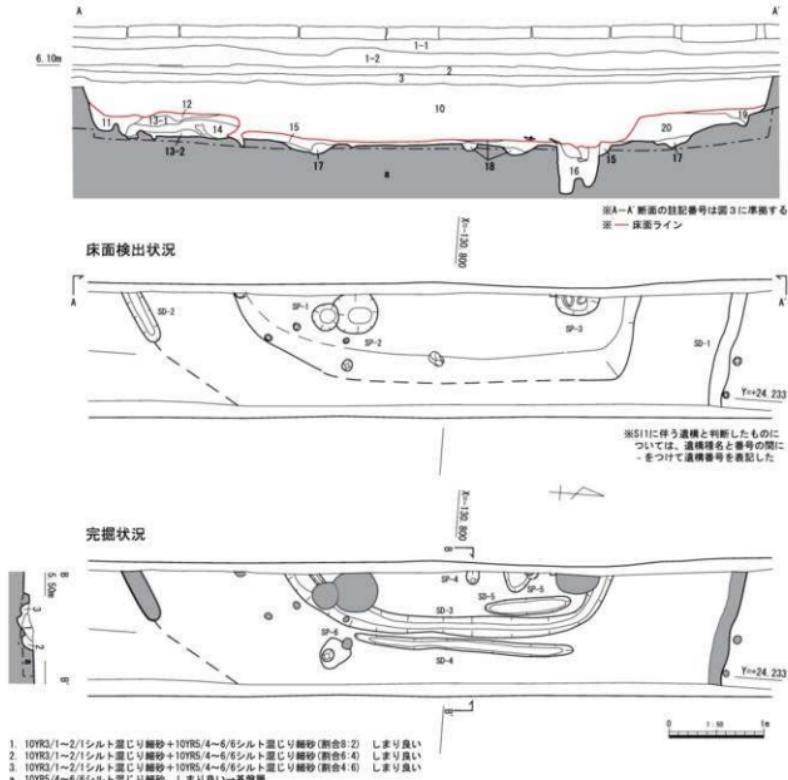


図4 SI1 平・断面図

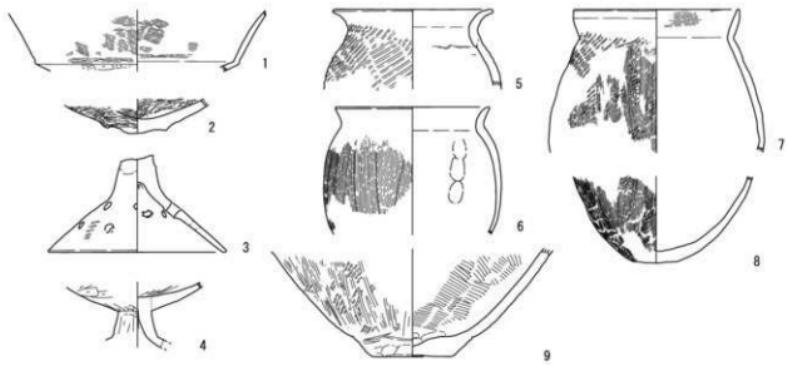


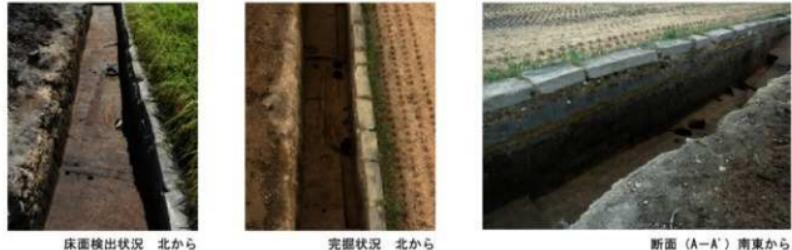
図5 SII 遺物実測図 S=1:4

0 1.4 10cm

番号	種別	断面	底名	出土遺構	口径	底径	高さ	色調(内)	色調(外)	形状	出土	腐朽状況	調査内	調査内	備考
1	土器	筒形	直筒	1区	30	—	10	10H6-2	10H6-2	筒	10H6-2	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りが付く 横ナタ削りの跡か 表面無光
2	土器	筒形	直筒	1区	30	—	10	10H6-4	10H6-3	筒	10H6-4	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
3	土器	筒形	直筒	1区	145	82	10	10H6-3	10H6-3	筒	10H6-3	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
4	土器	筒形	直筒	1区	30	—	8	10H6-3	10H6-3	筒	10H6-3	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
5	土器	筒	直筒	1区	131	—	8.0	10H6-3	10H6-3	筒	10H6-3	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
6	土器	筒	直筒	1区	129	—	9.0	10H6-6	10H6-6	筒	10H6-6	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
7	土器	筒	直筒	1区	—	37	12.0	22H6-6	10H6-3	筒	22H6-6	筒内少部分が剥離	22H6-1	22H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
8	土器	筒	直筒	1区	138	—	10.0	23H6-6	10H6-4	筒	23H6-6	筒内少部分が剥離	23H6-1	23H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光
9	土器	筒	直筒	1区	—	68	9.0	10H6-2	10H6-4	筒	10H6-2	筒内少部分が剥離	10H6-1	10H6-2	横ナタ削りの跡か 表面無光

(1)断面-遺構の幅は約2.5cmである。(2)の値は平均、(3)の値は最高。

表1 SII 遺物観察表



床面検出状況 北から

完掘状況 北から

断面(A-A') 南東から



写真2 SII 遺構・遺物写真

番号は実測番号に対応

(2) 穴建物跡 SI2

2区中央において堅穴建物跡の南東部を検出した。多くの範囲が調査区外に位置しており、かまどなどの燃焼施設は不明である。建物の規模は、確認できた範囲で南北約4.5m、東西約2.1mを測り、平面プランは隅円方形を呈する。遺構面から床面までの深さは約0.2m、その下に厚さ約5~10cmの貼床が全面に施されていた。また、南東角に長さ1.9m、幅0.9mの高床部を検出した。床面との高低差は、約0.2mである。床面には幅約0.1m、深さ約0.06mの周壁溝が周囲にめぐらされていた。遺構の南東部分では、掘方の直径約0.3m、深さ約0.45mのやや楕円状の柱穴（SP-1）を検出した。建物に伴う柱と推察される。

SI2は、出土した土器から庄内式期に相当する遺構と判断した(図7)。このうち、貼床直上で確認した土器(図6 №1、図7 14)は、壺の胴部に縦に半円形の櫛描コンバス文が2条連続して施されている。

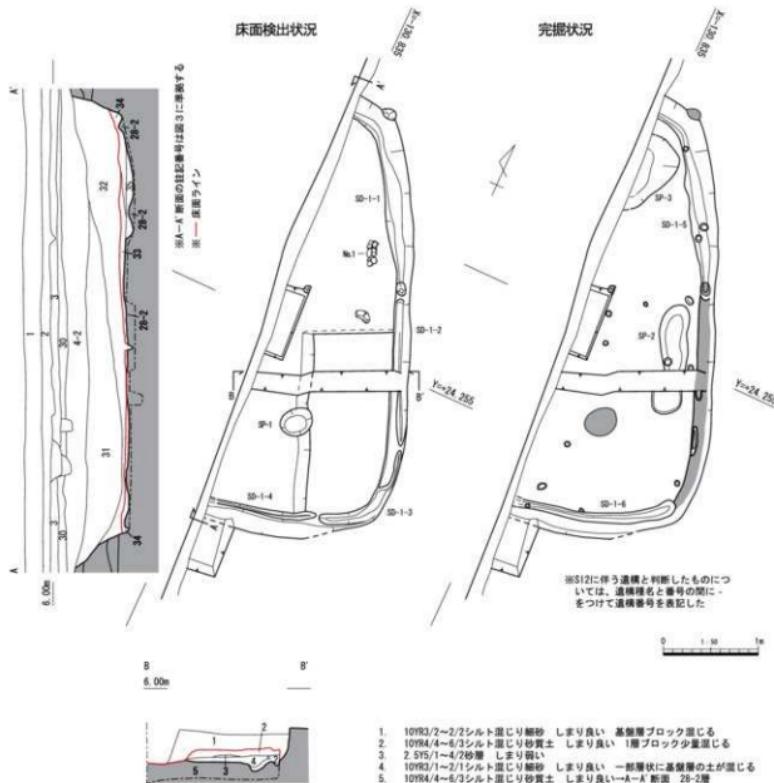


図6 S12 平面図・断面図 S=1:50

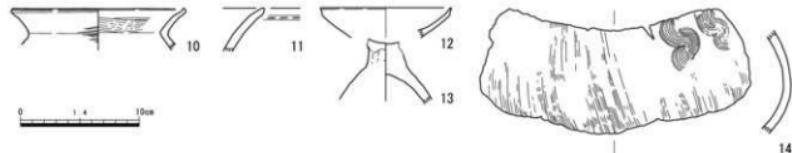


図7 S12 遺物実測図 S=1:4

番号	種類	器種	名前	出土場所	口径	高さ	幅	色調外	色調内	焼成	出土	発見状況	調査員	調査内	備考	
10	土器	縦縫合	壺	2区	30	144	-	0-0	10H03/3	10H04/4	陶質	5~6mm以下の火候の低	口縫合から断面	少キーナデ	ナデ	底面火
11	土器	縦縫合	壺	2区	30	-	-	140	10H03/4	10H04/2	陶質	5~6mm以下の火候の低	口縫合部の一部	様ナデ	ナデ	
12	土器	縦縫合	小壺	2区	32	11	-	225	10H03/4	10H02/2	陶質	3~4mmの火候の低	内側1/3	ナデ	ナデ	口縫合の火候底火
13	土器	縦縫合	小壺	2区	32	-	-	225	10H03/4	10H02/2	陶質	3~4mmの火候の低	底上1/3	ナデ	ナデ	口縫合の火候底火と、火候正しく、火候一様化
14	土器	縦縫合	壺	2区	30	-	-	8.0	9H03/8	9H01/1	陶質	0.2mm、底面の白色	横縫合の一部	様・ワーモナデ	ナデ	土器火、縫合部の火候は、火候正しく、火候一様化

出土位置：S12-2区-10H03/3-10H04/4 10cm×10cm×10cm

表2 S12 遺物観察表



断面 (A-A') 東から

断面 (B-B') 南から



写真3 S12 遺構・遺物写真

※数字は実測番号に対応

(3) 自然流路 NR1

2区の南端および、確認調査5区で検出した堆積層である。

2区では、1区の北端の遺構検出レベルである標高6.0mと比較して、遺構検出面のレベルが徐々に低くなり、不安定な様相に変化する。SI2付近での遺構検出面の高さは、約0.2m下がっていたが、そこから南側に向かつてさらに低下し、弥生土器を包含する東西方向の細い溝状を呈する堆積層が現れる（図3 68層）。

このあたりから南は、水分を多く含む粘質の強い土層が主体となり、調査区南端から11m付近より南では、粘質土層の狭間にランダムに砂や砂礫が入る堆積状況がみられる。この砂層からまとまって出土した遺物の時期は、おおよそ庄内式期にあたることから、これらの堆積層は、古墳時代初頭頃に存在した自然流路の埋土である可能性が推測される（図8）。

なお、上層には古代の須恵器を包含している層が0.3m程度堆積しており、その上面からSELが構築されている。

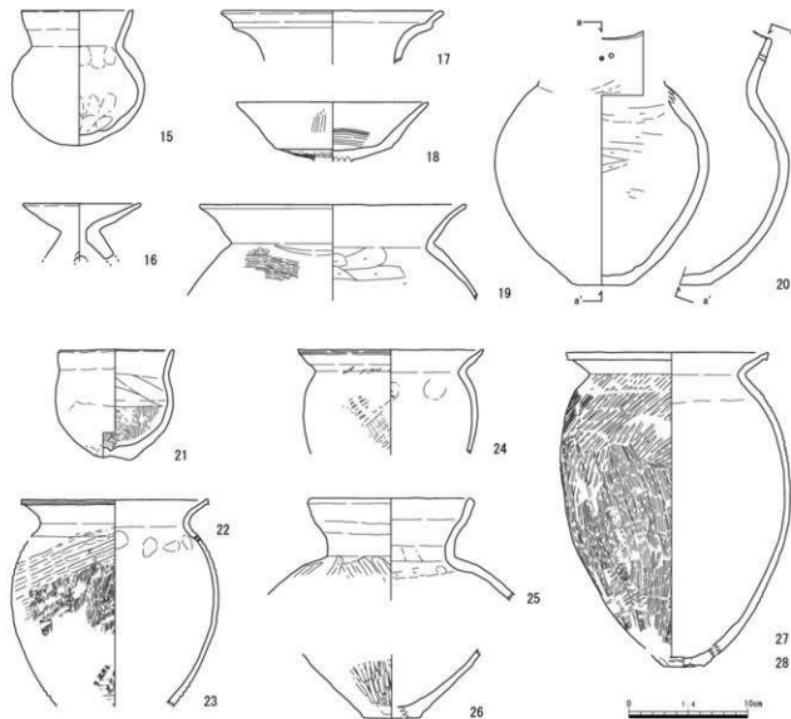


図8 NR1 遺物実測図 S=1:4 (15~20:2区、21~27:確認5区)

番号	地名	遺跡名	区名	出土箇所	口径	底径	高さ	色調(目)	色調(内)	形状	断土	構造状況	認定対象	認定基準	備考
15	上野町 （旧）	小石	2区5-2	192	80	113	239±0.3	59±0.4	59±0.4	口縁部に山の形を刻んだ 縦縫合の壺	柱穴	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺
16	上野町 （旧）	小石	2区5-2	166	-	148	239±0.3	59±0.4	59±0.4	口縁部に山の形を刻んだ 縦縫合の壺	柱穴	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
17	上野町 （旧）	小石	2区5-2	22層	187	-	245	239±0.3	239±0.3	縦縫合	柱穴	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
18	上野町 （旧）	小石	2区5-2	下層	161	-	239±0.3	109±0.2	239±0.3	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
19	上野町 （旧）	小石	2区5-2	下層	222	-	81	109±0.3	109±0.2	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
20	上野町 （旧）	小石	2区5-2	-	214	42	239±0.1	239±0.1	239±0.1	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
21	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	165	30	93	239±0.4	239±0.3	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
22	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	156	-	378	109±0.2	109±0.2	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
23	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	156	-	313	109±0.2	109±0.2	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
24	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	156	86	239±0.6	239±0.3	239±0.3	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
25	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	138	-	85	109±0.3	109±0.2	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
26	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	-	43	-	109±0.3	109±0.2	縦縫合	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	柱穴付一輪縫合の壺	
27	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	169	-	248	239±0.6	239±0.3	天の形を刻んだ 縦縫合	柱穴	天の形を刻んだ 縦縫合	天の形を刻んだ 縦縫合	天の形を刻んだ 縦縫合	
28	上野町 （旧）	小石	2区5-2	土窯跡	-	34	10	91±0.6	73±0.3	239±0.3	天の形を刻んだ 縦縫合	柱穴	天の形を刻んだ 縦縫合	天の形を刻んだ 縦縫合	

1cmは概算値で、実際は約2cmである。印字の数字は、測定値である。

表3 NR1 遺物観察表



写真4 NR1 遺構・遺物写真

番号は実測番号に対応

3. 古代の遺構

(1) 挖立柱建物跡 SB1

1区の東端で二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺60cm～70cmを測り、形状は不整形であるものの方形を指向する。柱根の痕跡が不明瞭であるため、柱径等は確認できなかった。建物の南北主軸は、N 4° Wをとる。遺構の時期は、遺物が出土していないため特定できない。

(2) 堀建柱建物跡 SB2

1区の北西部で二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺35cm～50cmを測り、形状は方形を指向する。建物の主軸は、N 4° Wをとる。遺構の時期については、遺物がほとんど出土しなかったため特定できない。

(3) 堀建柱建物跡 SB3

1区の北西部で東西二間、南北二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺45cm～55cmを測り、形状は方形を指向する。建物の主軸は、N 4° Wをとる。遺構の時期については、SP51の掘方から出土した遺物から7世紀以降の時期があてられるが、小片のため特定は困難である。

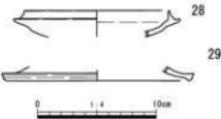


図9 SB3 遺物実測図 S=1:4

番号	種別	緯度	経度	区名	出土層	口径	掘幅	基底	色調(目)	色調(目)	地式	出土	時代(目)	調査(目)	調査内	備考
28	遺構跡	北東	1区	SB1	SB1000P01	12.1	-	2.0	N4°	N4°	良好	0.1mの幅広い2段の柱孔合計	二重壁1.12	○ノロゲ	○ノロゲ	既確認元
29	遺構跡	北東	1区	SB2	SB1000P01	-	15.4	0.6	N4°	N4°～N6°	良好	0.1mの幅広い2段の柱孔合計	既確認の一部	○ノロゲ	○ノロゲ	既確認元

表4 SB3 遺物観察表



SB1 東から

SB2 北から

SB3 東から

SP8断面 北から

SP51断面 東から

番数字は実測番号に対応

写真5 SB1～3 遺構・遺物写真

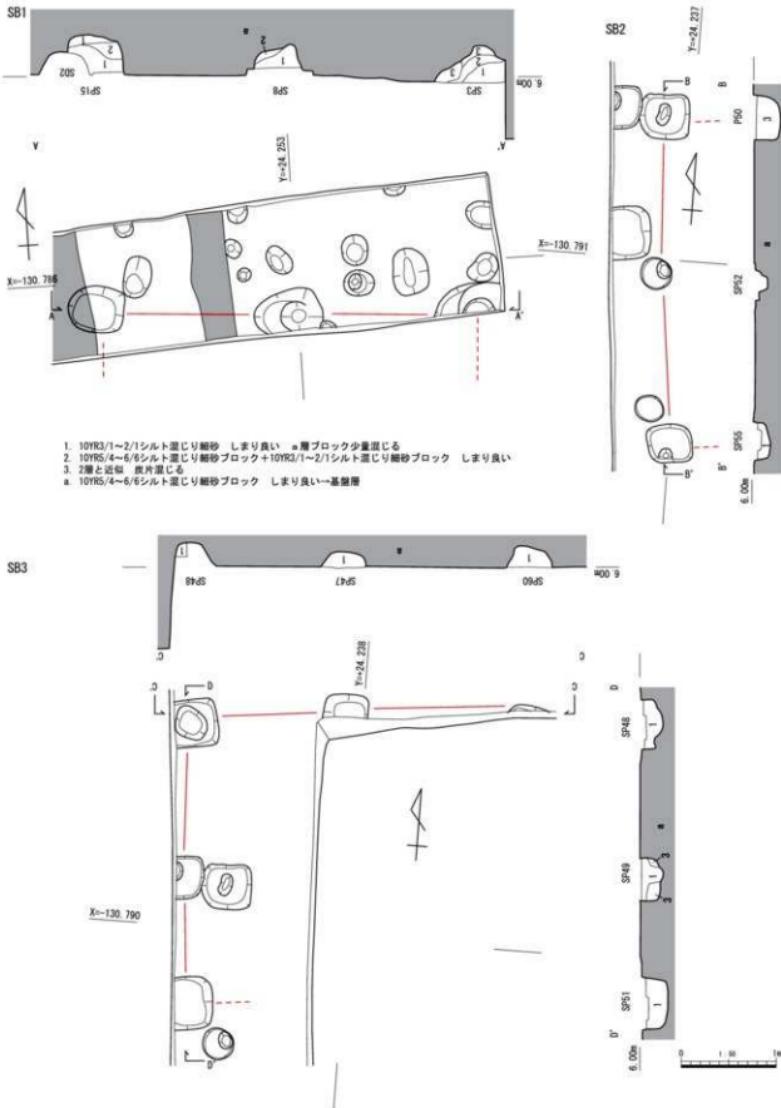


図10 SB1~3 平・断面図 S=1:50

4. 中世の遺構

(1) 井戸 SE1

2区の南側で検出した遺構である。直径1.05m、調査区西壁で観察した掘方の最大幅は5.0mを測る(図3)。深さは0.8mまでを調査し、それより下層については工事の影響が及ぼないため、現地保存とした。

井側に拳大から人頭大程度の割石を用いた石組み井戸である。出土遺物がなかったため詳細は不明であるが、SR1の上層に堆積した古代の須恵器を含む土層を切って構築されていることや、井戸の形状から平安時代末から、鎌倉時代頃の遺構であると推察される。

(2) 溝 SD1～5

SD1、2は1区で検出した南北方向の溝である。規模は、SD1が幅0.3m・深さ0.1m、SD2が幅0.55m・深さ0.28mを測る。

SD3～5は、2区で検出した東西方向の溝である。SD3は幅0.4m・深さ0.2m、SD4は最大幅1.25m・深さ0.3m、SD5は最大幅1.15m・深さ0.38mを測る。埋土は、全て10R5/1～6/1シルト混じり細砂である。

出土遺物が細片のため時期の特定は困難であるが、全ての溝がこの付近の条里地割りの方向である、N4°～Wを主軸とするか、直交している。このことから、この地域の条里地割りが完成したとされる、12世紀以降の水田耕作に伴う溝である可能性が高い。

第3章 総括

今回の調査では、弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡、古代とみられる掘立柱建物跡、中世の井戸などを確認した。

遺構の時期、構成については、丁・柳ヶ瀬遺跡の既存調査の成果を踏襲する内容であった。しかし、遺跡の北端での遺構の分布状況の一端が明らかとなった。

また、微高地の縁辺部での調査であったことから、付近の古環境や、遺跡内での遺構の立地環境ををうかがい知る情報が得られた。

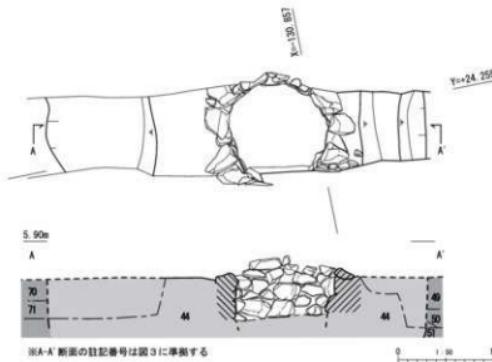


図11 SE1 平面図・断面見通し図 S=1:50



写真6 SE1



1区 北側（東から）



1区 西側（南から）



2区（北から）



2区 南側（北から）

写真7 調査区全景

報告書抄録

ふりがな	よろ・やながせいせきはつくつちようさほうこくしょ							
書名	丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	小柴 治子・関 梓							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成26年（2014年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よろ・やながせいせき 丁・柳ヶ瀬遺跡	ひょうごけんひめじ 兵庫県姫路市 かにゅうけんひめじよろあやざわがいせき 勝原区丁字堂塙内 451番1 他	28201	020327	34° 82' 07"	134° 59' 83"	2013.9.30 ～ 2013.10.19	268.84 m ²	宅地 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
丁・柳ヶ瀬遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	竪穴建物跡、河道	土師器		20130282		
		古代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器				
		中世	溝、ピット、井戸	須恵器、土師器				

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第22集

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

発行日 平成26年（2014年）3月31日

編集	姫路市埋蔵文化財センター	〒671-0246	兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発行	姫路市教育委員会	〒670-8501	兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本	株式会社ディリー印刷	〒671-0218	兵庫県姫路市飾東町庄57-2